

2024 年度 311 ゼミナール第6期

原発事故被災と教育を考える班 活動報告書



G3178	川内野	裕介	(4 年)
G4009	我妻	青樹	(3 年)
G4066	蒲生	結香	(3 年)
G4087	小針	愛香	(3 年)
G4133	菅原	悠太	(3 年)
G4193	馬渡	紗恵	(3 年)
G6084	小林	萌花	(1 年)

目次

1. はじめに

2. 視察行程

3. 一次産業の現状

- ・飯館村畜産農家山田猛史さんの視察と聴き取り

- ・請戸漁港の視察と聴き取り

4. 被災地復興の足取り

- ・双葉町のまちづくり会社「ふたばプロジェクト」視察

- ・河北新報富岡臨時支局岩田記者との語り合い

5. 先端技術拠点の最前線

- ・福島水素エネルギー研究フィールド視察

- ・福島ロボットテストフィールド視察

6. 総括・展望

7. メンバー振り返り

1. はじめに

我々、原発被災と教育を考える班は今年度で 6 年目の活動になる。前年度は、今まで行ってきた被災地を訪れたり、現地の方々の話を聞いたり見たりするという姿勢に加え、複合災害についての理解を深めたり、被災地に教育機関が復活していることを踏まえ、教員としてどのように語り継ぐかについて考えたりした。

今年度は、前年度の姿勢を前提にしつつ、一次産業に目を向け、飯館村にある畜産農家や浪江町にある請戸漁港を訪れ、震災前と後での変化や風評被害について聴き取りを行った。

また、富岡町に在住している新聞記者や双葉町を訪れて現在の復興状況について意見交換を行いながら、まちづくりについての理解を深めた。

視察は 2024 年 8 月 29 日、30 日の 2 日間で行われた。

2. 視察行程

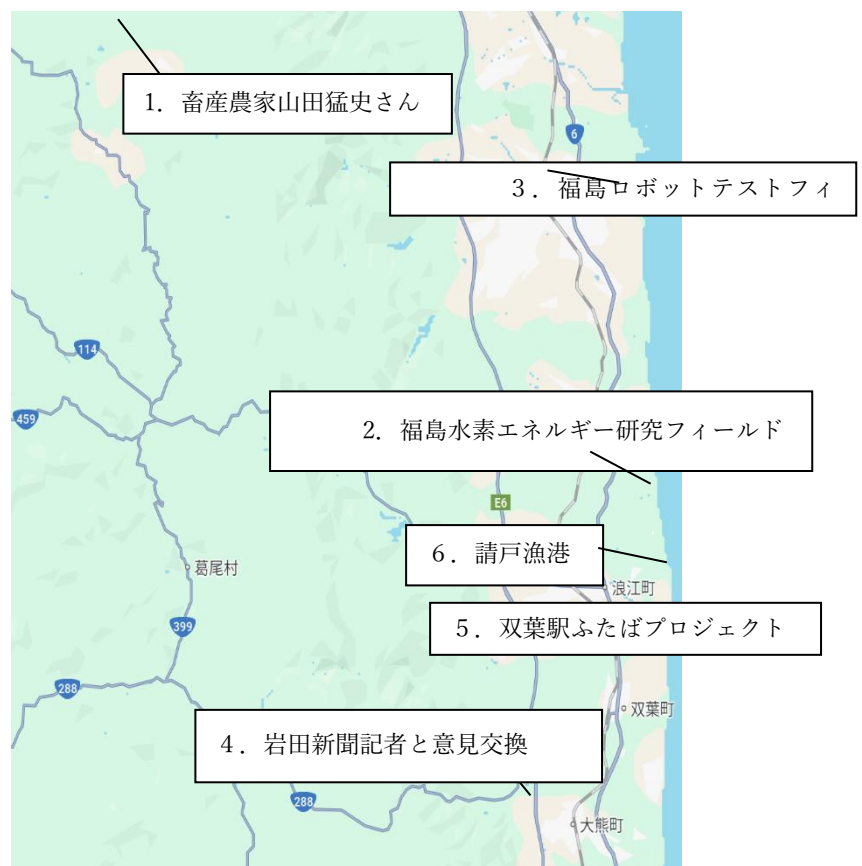
視察行程は以下の通りである。

* 2024 年 8 月 29 日（木）

1. 飯館村畜産農家視察
2. 福島水素エネルギー研究フィールド視察
3. 福島ロボットテストフィールド視察
4. 岩田記者との意見交換
(宿泊・大熊町ほっと大熊)

* 2024 年 8 月 30 日（金）

5. ふたばプロジェクト視察
6. 請戸漁港訪問



3. 一次産業の現状

【飯館村畜産農家の視察】

1 飯館村の概要

震災発生時

平成 22 年 人口 6209 人
 世帯数 1700 世帯
(令和 2 年) 人口 1318 人

現在

令和 6 年 人口 4577 人
 世帯数 1800 世帯

避難区域等について

平成 23 年 3/11	震度 6 強の地震が飯館村を襲う。津波は来ていない。電気、電話、水道などのライフラインが断絶。 この日の夕方から福島第一原発から半径 3,10,20 と徐々に広がるように避難指示が出される。
3/13	南相馬市や双葉郡から約 700 人が避難してくる。 避難所を 3 か所設置するなどして対応を行う。
3/15	避難者が 1100 人を超える。 天候が雨や雪になったことで、汚染が広がったのか、放射線量が急上昇する。 避難所が 5 か所になる。
3/19	3 か所の避難所を閉鎖する。 栃木県鹿沼市避難所への集団避難（第 1 陣）を行う。
3/20	ブロッコリーや原乳からの調査によって、県が県産露地野菜全ての出荷自粛及び原乳の出荷・自家消費自粛要請。 村内すべての避難所を閉鎖。 栃木県鹿沼市避難所への集団避難（第 2 陣）が行われる。
4 月	計画的避難区域に指定され、全村避難対象に。
平成 24 年 7 月	避難指示区域が見直され、当時の空間線量率に基づき長泥地区は村内 20 行政区で唯一「帰還困難区域」に指定される。
平成 29 年 3 月	村内の「避難指示解除準備区域」「居住制限区域」の避難指示が全面解除が行われた。

●「避難指示解除準備区域」

年間積算線量が 20 ミリシーベルト以下になることが確実と確認された区域。区域の中への立入りは認められ、住民の一時帰宅（宿泊は禁止）や病院・福祉施設、店舗等の一部の事業や営農は再開できる。

●「居住制限区域」

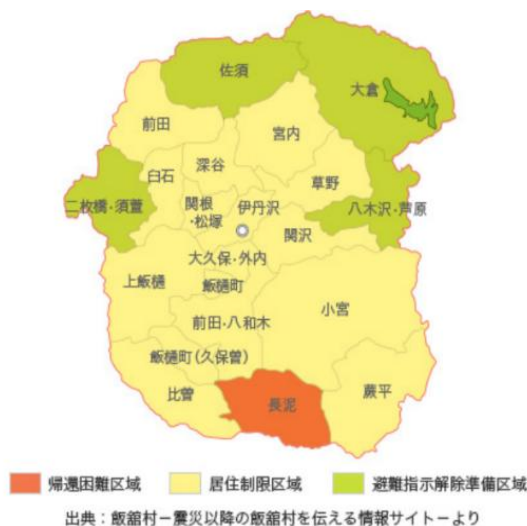
年間積算線量が 20 ミリシーベルトを超えるおそれがある、引き続き避難の継続が求められる地域。住民の一時帰宅や、道路などの復旧のための立入りができる。

●「帰還困難区域」

年間積算線量が 50 ミリシーベルトを超えて、5 年間たっても年間積算線量が 20 ミリシーベルトを下回らないおそれがある区域。バリケードなど物理的な防護措置を実施し、引き続き避難の徹底が求められている。

●畜産業

震災前は 230 軒の育牛農家が 2800 頭の牛を飼っていた。放射能汚染に伴う全村避難で育牛農家は廃業や他地域への移転を迫られた。令和 4 年度時点で村内の畜産農家数は 12 件、村内の飼育・繁殖頭数は 750 頭ほどになっている。



②畜産農家山田猛史さんの視察と語り合い



農林水産業

飯館村畜産農家

山田 猛史（やまだ たけし）

原発事故前、ブランド牛として高い評価を受け全国各地に出荷されていた「飯館牛」。原発事故の影響による全村避難に伴い、廃業を余儀なくされた畜産農家も多い中、避難先で飼育を継続。現在は、避難指示が一部を除き解除された村内での畜産再開、「飯館牛」の復活に挑戦している。

●概要

震災前は飯館村で繁殖牛 29 頭を飼育しており、ほかにも米やたばこ、ブロッコリー栽培を自宅で行っていた。震災後の 6 月に新しく牛舎を見つけ、中島村に借りて牛とともに避難。その後福島県飯野町に移り、養鶏場を改造して牛舎を作っている。県による牧草地での一般放牧の実証実験にも協力。現在飼養頭数は約 100 頭になる。三男で息子の豊さんとともに畜産を行っている。

2016 年春に福島県畜産研究所と共同で水田 2 ヘクタールを除染し、牧草を育てる実証実験を開始。2017 年春には飯館牛の完全復活を目指し、繁殖牛 6 頭、約 3 ヶ月間試験放牧を

[illegible]

目 次	
刊行にあたって・目次	2-3
飯館村17区および周辺の 代表的な自給飼料生産地	4-5
飯館村17区をモデルとする 採草用牧草地と放牧地の複合管理	6-7
水田放牧の留意点と効果	8-9
飼育設備および飼料の冬季対策	10-11

飯舘村17区および周辺の代表的な自給飼料生産地(一部)



今なお飯館村で農家を続ける山田さん。震災発生時、あまり深く被害について影響を考えてはいなかったものの、計画避難地域に指定されたことで、再び飯館村に戻ってくるといふ思いを抱きつつ、この地から離れないといけない現実を受け入れ、別の場所で農家を続けることに決めたそうだ。候補地を探し、県内の会津地方や県外の長野県八ヶ岳まで足を運んだそうだが、どこも適した場所ではなかったそうだ。特に長野県八ヶ岳はキャベツ畑が広がり、牛を飼うことができるような場所ではなかったそうだ。また、たとえ農業が

始められても、放射線の影響で周りの農家に迷惑をかけることはできないという考えも候補から外れた要因だそう。最終的には施設や環境等の条件がそろった中島村へ避難を行った。

このような時期に住民の方にアンケートを行ったそう。「村に戻るか」「村に帰って何をするか」という内容だったが、放射線による影響、先祖代々の土地をはがされてしまった事等が影響し、ほとんどの農家が辞めてしまったそう。



その後、山田さんは飯館村の広大な土地を借り入れた。離れざるを負えなかった仲間、農業をやめてしまった仲間等、いつでも戻ってこられるようにという思いの下、土地の借り入れを行ったそう。また、今はその周辺の土地の表土剥ぎが進み、来年からその土地を利用しようとする人がいるそう。

その後、ノルウェー調査への同行や今後の飯館村での居住について大学教授の方とも激しい討論を行った経験を通し、飯館村の未来について考え、多くの取り組みを行っている。

●聴き取りから分かったこと ①自身の風評被害の捉え方

今回山田さんへ一番初めに、当時の牛への風評被害について質問を行った。回答については、「風評被害を実体験したことがあるか」「風評被害を聞いたことがあるか」の二点について大きく分かれた。

最初の「風評被害を実体験したことがあるか」について、山田さん自身が他人から何かを言われることや、何かされたというような直接的な体験をしたことはない様子であった。山田さんが競りにかけた自身の牛が、震災後の最初や二回目の競りで、多少金額が下がっていると多少気になった程度のようなようだった。

その後の競りでは山田さんの牛は売れるようになったそう。理由として、仲買の方々の中には、福島県産の牛の値段が安いということで、福島県産の牛を目的に購入する人が現れるようになったからだと話されていた。また、親牛と子牛の認識も異なり、親牛に対して風評被害が強かった。理由として、親牛は放射線を浴びたえさを直接接種していたことが原因であると山田さんはおっしゃられていた。代が移り変わった子牛が競りにかけられるようになったことが、売れるようになった要因だと考えられる。

●聴き取りから分かったこと ②畜産業界の風評被害の捉え方

二点目の「風評被害を聞いたことがあるか」についてだが、同じように牛を競りにかける仲間から、風評被害ではないかと考えられるような震災後の競りでの出来事を聞いた話をしていただいた。

様々な地方で育てられた牛がかけられるような大きな競りでは、「福島県産」の牛が紹介されると、仲買の方々は興味をなくしたように見向きをしなくなることや、中には競りの会場から出てたばこを吸いに行く仲買の方々の姿が見られたそう。「福島牛は売れ残るからもってくるな」と心無い言葉を発する方もいたそう。



福島第一原子力発電所からの放射線による影響は、震災当時の風向きが影響したことで、飯館村を含めた北西方向に位置する市町村方面に影響があった。そのため、北西方面に位置しない会津地方は放射線の影響を強く受けていない。しかし、「福島県産」ということが影響し、福島全域の牛の値段の下落や、競りで注目度の低下を引き起こしたようだった。

山田さんによれば、これは牛に関わらず、福島県産の野菜や魚も同じように値段が下がったとおっしゃられていた。山田さんは「飯館村にまるで原発があるようだ。恩恵無くして影響だけある」「会津の方々はかわいそうだった。申し訳ない」と話すほどであった。

●聴き取りから分かったこと ③風評被害の責任

山田さんとの語り合いの中で、東北電力や福島県に対しての責任について、どう考えるかについても聴いてみた。

山田さんは「処理水放出や汚染土が無いことに越したことはないが、やむを得ない」「対応がもう少し早かったら良かった」「震災後、県に戻ってくる際の具体的な指示が欲しかった」と話していた。県からの賠償金等の資金で整備が進んだが、迅速な取り組みができていれば、現状とは異なった未来になっていたのかもしれないという感想だった。

現在、山田さんが借りている土地は約 42 ヘクタールにも及び、18 ヘクタールはソーラーパネル設置等の企業への貸し出しを行っているようだ。また、現在の土地の利用者として、数多くの県外からの新規参入者が多いようだ。山田さんがおっしゃられていたが、土地に関しては手続きが簡単というのが一つの要因なのかと考えられる。

2 考察

今回の視察と聴き取り調査を通じて、風評被害は「福島県産」ということが、競りや販売において壁になっていたことが分かった。福島第一原子力発電所の事故、海外でも FUKUSHIMAと言われるように、原発＝福島というのは結びつきが強いのかと考えた。また、場所や人によっても被害の体感の仕方が異なることが分かった。科学的データに基づく証明が行われていても、購入に関しての偏見があったことが分かった。

特に調査前との印象が異なった点として、風評被害との影響があるが、逆に被害にあっていた福島県産の牛を購入目的にしていたというのはとても驚いた。また、被害に遭われているが、まったく牛が売れないということではなかったことに私たちのイメージと差があった。

私たち自身にも根付く偏見に気づくことができたこと、実際に足を運んで見て聞くことの体験の重要性を改めて感じた。

山田さんから最後に「教員になる私達へ」のメッセージをいただいた。その中で、「偏った情報ではなく、まずはしっかりと科学的で根拠のあることを伝えてほしい」とおっしゃられていた。今後の教員には、根拠のない書き込みやや評判に左右されない確かな情報・知識を子供たちに伝える・発信していくことが必要だと考えた。



【請戸漁港の視察】

●概要

私たちは浪江町にある相馬双葉漁業組合請戸地区事務所の玉野真喜さん、網谷信行さんにお話を伺った。お二方とも請戸地区の出身であるため、現在の請戸漁港の現状だけではなく、震災当時のお話も伺うことができた。

請戸漁港は、福島県浜通り地方のほぼ中央に位置している。福島の沖合は黒潮と親潮が混ざり合う潮目の海の影響により、豊かな漁場になってため、福島県沖で取れる魚は「磐城もの」と呼ばれる海産物ブランドになっている。

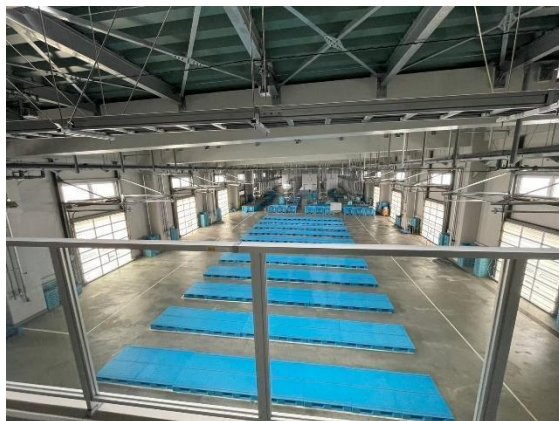
その中でも、請戸漁港で水揚げされる海産物は特に高品質で「請戸もの」として知られている。請戸漁港での競りは、



漁港内の「請戸荷捌施設」で行われている。請戸荷捌施設では、水揚げした水産物を競りまで水槽に入れ、活魚で競りを行うことが伝統的に行われてきた。競りは声で会話をしながら行う「声競り」で行われており、競りの時間の請戸漁港は活気があふれている。

請戸荷捌施設内の写真は右のようになっている。写真右側が海になっており、水揚げした水産物は右側から運ばれてくる。写真奥には水槽が置かれており、水揚げした際はこの水槽に魚を入れ、写真手前のパレットで競りが行われる。

震災前と比較して変わったことは、壁の設置である。原発から 6 km しか離れていないため、安全であることをアピールするために設置された。



●再開までの歩み

震災や原発事故の影響により、事務所がぐちゃぐちゃになったり市場が液状化したりと請戸漁港は大きな被害を受けた。

請戸での漁は請戸で獲ったものを相馬まで運ぶという形で 2013 年から試験操業として行われていたが、請戸漁港は 2020 年になるまで再開することができなかった。震災前は約 100 隻あった漁船も津波の影響によって 86 隻を失ってしまった。

玉野さんの中には、請戸で漁を再開してよいのか迷う気持ちもあったというが、「請戸に戻ることができないのか」という漁師の方々の声に押される形で請戸漁港の復活に向けて動き出した。漁師の方々の中には、実際に損傷した船を岩手で直す方や北海道で船を作り持ってくる方もいた。請戸漁港では国の補助事業があって再建のめどが立ったという教訓を踏まえ、能登でも支援が必要であるのでは、と玉野さんは話していた。

●風評被害と請戸漁港

私たちは福島県沖での水産業と聞くと、風評被害の深刻さに興味関心が向いてしまう。しかし、「風評被害は少なかった」「何が風評被害なのかわからなかった」と玉野さんは話していた。

もちろん風評被害がなかったわけではなかったが、漁を再開してからの価格の変動は少なかった。メディアでは風評被害の深刻さに視点を当てた報道が多かったため、「メディアにいいように使われているのでは?」と感ずることも少なくなかった。

その他にも、イベントに行って実際に食べてもらったり出荷する魚を検査したりすることでイメージの払しょくに努めた。風評被害の PR は長すぎても不安を煽る結果になるため、バランスの取れた報道が大切であると話していた。

●処理水問題と請戸漁港

視察した 8 月は、ちょうど処理水の放出から 1 年が経過し、様々なメディアで東北地区の水産業での被害について報道されていた。

しかし、現在の請戸漁港では輸出メインで漁業が行われていないため、風評被害などのダメージは少なかった。処理水の放出前は仲買人が心配している面があったが、処理水の放出後は大きな拒否反応はなく、価格の変動もなかったという。

漁師の方々の「普通に魚を獲って、買ってくれる魚を売るだけ」というスタンスや国の PR などの影響もあり、消費者が応援してくれている環境になっている。福島県沖の漁港であるという事を知り、私たちが「処理水を放出したことで風評被害を受けている」という先入観を持ってしまっている側面があるように感じた。

●教師になる私たちに向けて

教師を目指す私たちに向けて、玉野さんと網谷さんからそれぞれメッセージを頂いた。「震災によって請戸には〈津波、放射線、学校にいけないという気持ち〉という 3 つの被害があった。さらに、悪いニュースは広まりやすい一方、良いことやよくなったことは広まっていかない。教師を目指す私たちには正しい情報を教えるだけではなく、実際に体験したりするなどしてもともと請戸がどんな地区だったのかも知っていて欲しい」。

●考察

今回の視察を通して、震災を経験した請戸漁港の歩みを聞くことができた。私たちは限られた情報源を通じて産業の現在を知ることが多い。そのため、請戸漁港は処理水の放出によって大きな影響を受けていることを前提としながら調査を進めた。

しかし、請戸漁港の実態は私たちイメージしていたものと全く異なっていた。私たちは風評被害への意識が強くなりすぎて、被災地の実態を正しく理解しきれていないように今回の視察を通して感じた。

被害などの負の面に着目することも大切だが、その後の被災地の歩みにも触れていく必要があると感じた。

4. 被災地復興の足取り

【双葉町のまちづくり】

私たちは、双葉町の JR 双葉駅に事務所を置く「一般社団法人ふたばプロジェクト」を訪れた。原発事故により双葉町は全町避難となっていたが、2022 年に特定復興再生拠点の避難指示解除を受け、行政と民間が協力し、双葉町へ新たに移住する町民主体のまちづくりを実現するために「一般社団法人ふたばプロジェクト」が設立された。

●渡辺雄一郎さんの聴き取り

一般社団法人ふたばプロジェクトの渡辺雄一郎さんからお話を伺った。渡辺さんは同プロジェクトで事務局次長を務めており、震災当時は東京電力の社員であった。原発事故から復興していく双葉町の様子を中心に、震災当時の心境や双葉町の未来についての話をしてくれた。

○双葉町の被災と経緯

震災前、双葉町には 7140 人、2611 世帯の人々が住んでいた。2011 年 3 月 11 日東日本大震災が起これ、双葉町は 16.5m の津波に襲われ、3 キロ平方メートルが浸水し、福島第一原子力発電所の事故もあり、翌 12 日に全町避難となった。そこから 9 年後の 2020 年 3 月 4 日に一部避難指示解除、さらに 2 年後の 2022 年 8 月 30 日に特定復興再生拠点の避難指示解除、居住開始という流れに至る。



○東電社員としての当時の心境

海に行き来をしなくても供給することができることから運搬のリスクが低いとされていた原子力発電は、当時の東電の 20% を賄っていたという。当時、社員たちは安全に管理していることを誇りに思っていたが、震災を通してすべてなくなってしまったため、そこから慌てて勉強をしたという。また、お客様対応の面では準備不足であったと話していた。現在、東電社員は、全員 1 度は福島に勤務することになっているが、もう 1 年いたいと思う社員が多いと話していた。

○現在の双葉町

現在、双葉町には約 130 人の居住者がいる。現在双葉町に住んでいるのは被災者と移住者が約半数ずつで、移住者はボランティアや復興に取り組みたい人、仕事を勇退し、社会に貢献したいという思いを持つ人だという。

○双葉町と被災者のつながり

実際に双葉町に戻ってきた、あるいは戻ってきたいと考えている被災者はごく少数であるが、双葉町の被災者の半数以上は今でも双葉町とのつながりを保ちたいと回答している。渡辺さんは、私たちはこのような思いを大切にしたいと語ってくれた。普段双葉町に帰ってこられない人に向け、年に 1 度ガーデンプロジェクトと呼ばれるプランターへの花植え活動を行ったり、帰ってきた人の心が安らぐよう、双葉駅ではバラを育てたりしており、自治体と人のかけ橋になれるような活動をしているという。

○双葉町のこれから

双葉町は 5 年後の 2027 年に 2000 人が住める町を目指しているという。しかし、

現在の状態ではインフラ設備等が整っておらず、現実的には厳しいとおっしゃっていた。今は復興税のお金で色々な施設を建設することができても、長期的な目で見ると、公的なものを増やして維持することができるのかという課題が残ってしまう。そのため双葉町の税金で公共施設等が維持できるよう、働く世代を増やすことが目標だという。また、復興を取りまとめるために、人々のよりどころとなるようなシンボルとなる新たな産業づくりを作ることも課題だと教えてくれた。

〔考察〕

渡辺さんのお話から、原発の被害を受けた双葉町の復興の様子を知ることができた。双葉に住んでいる人は少なくとも、つながっている人はたくさんいるということ、双葉プロジェクトでは、そんな思いを大切に、活動をしているのだということがよく分かった。



渡辺さんは教員を目指す私たちや子供たちへのメッセージとして、まずは一度双葉に足を運んでみてほしい、そして双葉町とつながっている人がたくさんいることを知ってほしいとおっしゃっていた。私たちは1度双葉町を訪れ、思いを聞かせていただいた者として、今回のことを伝え広げていく責務があると感じた。

●加藤奈緒さんの聴き取り

一般社団法人ふたばプロジェクトの職員加藤奈緒さんから話を伺った。加藤さんは、双葉町の山田地区出身で、震災当時は双葉南小学校の6年生だった。地震や原発事故で双葉町を離れてから、戻ってくるまでの話をしてくれた。

○震災前の双葉町の様子

双葉町は、東側には太平洋、西には山が広がり豊かな自然に囲まれた街である。震災前は、人口約7000人で、ビルや大きなショッピングモールなどはなく、人の繋がりが強かった。加藤さんが住んでいた山田地区は、代々土地を守り、この地に長く住んでいる家庭が多かった。農家も多く、野菜やお米作りが盛んであり、馬や鶏などを飼う家庭もあった。たまに、馬や牛が脱走して追いかけている姿を見たのを今でも覚えていると話していた。



○地震発生と原発事故による町全体の避難

震災当日、放課後にワックスがけの予定があり、廊下に机や椅子を置いていたため、地震が発生しても避難訓練で行っていた机の下に潜ることができなかった。外に避難の指示が出され、ランドセルを持って出る人、何も持っていかなかった人、靴を履き替えた人、靴を履き替えなかった人様々だった。まさかその時は、荷物を取りに行くことが困難になったり誰も戻れなくなったりするとは思っていなかっただろうと言っていた。

加藤さんは、家もあるし帰る場所もあるし、と安心していた。しかし、福島第一原発事故により、発電所がある双葉町は警戒区域に指定され、すべての住民が避難するよう指示された。発電所まで 4km の距離にある加藤さん家も警戒区域に指定されているため、普段なら 1 時間で着くところ 3 時間以上かけて川俣町へ避難した。

○原発事故後の避難生活

原発事故翌月の 4 月から加藤さんは福島市で中学校生活を開始した。新しい制服やカバンの準備は間に合わなかったけれど、学校側が卒業生や転校した子が使っていたものを用意してくれたおかげで入学式を迎えられ、ありがたかったと感謝の気持ちを述べていた。この当時もいつか双葉町に帰れると希望を持って生活していた。「もう、今の学校には行きたくない。友達のいる学校に行きたい」と避難してから初めてわがまを言ったが、親からは「今は無理だから頑張ってくれ」と言われ、それ以上何も言えなかったそうだ。

8 月に「集まれ双葉っ子」という避難をして離れ離れになった子どもたちが交流できる会が開催された。3 月 11 日以降、久しぶりに友達と再開し、心の底から笑え、このまま時間が止まってほしいと思っていたという。帰ってから、「離れていてもずっと友達だよ」とメッセージが友達から届いており、それがとても嬉しく、新しい中学校でも頑張ろうと前向きな気持ちになれるきっかけになった。

○一時帰宅

加藤さんが高校 3 年生の夏、震災から 5 年以上経って、ようやく一時帰宅が叶い双葉町に入れる日が来た。崩れた建物や街中を自分の目で見て、被害の大きさを実感し、夢の中を一人歩いているような感覚だったと話していた。それから毎年、お盆になると一時帰宅をして、家とお墓と双葉駅に寄っていた。

○ふたばプロジェクトでの決意

これまで学んできた介護職とは異なりやったこともない仕事内容で迷いがあったものの、曾祖母に背中を押され、2022 年 3 月に一般社団法人ふたばプロジェクトに入社した。加藤さんは、双葉町の桜を見ながら散歩をする会や双葉町図書館の本を活用した復興イベントなどを企画・運営したり、双葉町を訪れる人を案内したりしている。目標は、子供から大人まで、居住者も観光客も楽しめ、震災前のような賑わいを戻すことだと語ってくれた。

【考察】

原発事故を経験し、友達・家族の大切さや生きる意味、自分の限界は自分自身の弱さだということを学んだと話してくれた加藤さん。辛く、大変な経験もあった中で、今は前向きに双葉町を盛り上げようとする姿が印象的だった。双葉町のために戻ってくる若い人は少ないらしいが、加藤さんのように双葉町の賑わいを戻そうとする取り組みは少しずつ広がっていくのではないかとと思われる。



また、加藤さんは私たちに自分の想いを口にしてほしいと伝えており、何かをよりよくしていくためには、一人一人の想いや考えが大切だということを実感した。私たちにできることとして、双葉町を訪れたり、情報を発信したりして双葉町の復興を願っていきたい。

【河北新報富岡臨時支局・岩田記者との語り合い】

私たちは、河北新報社富岡臨時支局の駐在記者として、富岡町に住みながら記者をされている岩田裕貴記者と復興状況について語り合いを行った。場所は宿泊先の大熊町ほっと大熊。

岩田記者は2024年4月より河北新報紙面で「富岡に暮らす」という週一回掲載の連載記事を発行している。内容としては実際に富岡に在住して見聞きした人々の暮らしの出来事や、記者自身が感じた物事と被災地での課題を結びつけながら記事を通して発信し続けているとのことであった。



○現地駐在を決意した理由と変化した被災地観

岩田記者は東海地方出身で富岡には特に所縁があったわけではない。そんな彼が移住を決意した背景には、取材した人々たちとの関わりの中で感じた「もっと深く胸の内まで迫りたい」という思いだった。原発事故の取材を進める中で表面的な取材を行うのではなく、より近いところで関係を築き、人々のより深い思いに迫った取材を実現する。そのような思いで彼は富岡での記者活動を行っていた。

実際に現地での生活を行うことで、被災地に対する印象にも変化があったという。現地で暮らし始める以前は、被災地と聞いて帰りたいと願う人々が、生活基盤が整っていない中でひっそりと暮らしている場所である印象があったそうだ。

しかし、実際に暮らし始めることで人々が楽しく生活をしている姿を間近で見ることができたそうだ。被災地という言葉からはマイナスな印象を受け、暮らしも不十分な中で行っていると想像してしまう。だが、実際には人々は多少の不便はありつつも楽しく日常を過ごしている。これは現地を知らなくてはわからないことであり、マイナスイメージに負けないほどのプラスの楽しい出来事も被災地では起こっている。このことを教育者として子どもたちに伝えてほしい、とおっしゃっていた。

○岩田記者の考える現地取材活動の意義

岩田記者は、この現地取材活動を続ける意義は大きく分けて2つであると語っていた。1つは、節目のみで行われる信頼関係を伴わない報道との差別化である。報道を目的としたものではない、日常的な住民との関わりの中で作り上げることが信頼関係の中でこそ一歩踏み込んで聞くことができる人々の思いがあり、それを発信することが重要であると考えていた。

もう1つは、県外にて被災地の今を待ち望む人々に報道で応えることである。被災地について県外の人々が知る手段は、節目の報道を除くとほとんど見られない。その中で岩田記者が始めた週間連載に、県外で被災地に思いを寄せる人から感謝の声があったそうだ。今では県外から思いを寄せる人々、被災地に帰ることができない人々に届くことを願って報道を続けているそうだ。



○教育で伝えて欲しいこと

質疑応答の中で、私たちは教育者として子どもたちにどのようなことを伝えていってほしいかを質問した。それに対する岩田記者の答えは、マイナスイメージだけでない被災地観を広めていって欲しいとのことであった。

岩田記者自身がそうであったように、やはり被災地という言葉からはマイナスイメージを受け取りやすい。さらに、被災地の外からでは得られる情報も少なく、直接触れる機会が少ないことからどうしてもプラスイメージを持つことが難しいことが現状である。それでも、現地では人々は前に進み、悲しい思い出だけでなく楽しい思い出を日々作り出している。楽しさと活気のある町を実現するために、イベントを企画したり、新たな事業を開始したりして、一人一人が努力をしている。そういったマイナスだけではないプラスな出来事が一人でも多くの人に伝わることを、岩田記者は願っていた。

[考察]

岩田記者との語り合いの中で、私たちは岩田記者の取材活動にかける思いと、岩田記者が行っている活動の重要性を知ることができた。震災から年月が経つと、どうしてもメディアの情報はより新鮮な話題に入れ替わっていき、10年以上も前の災害に関する情報を得る機会は著しく減少してしまう。情報があつたとしてもそれは、震災からの節目でなされる報道であり、得られる情報は少なく、取り上げられる内容も限られてしまう。

その中で岩田記者のような地域に密着して人々と関わりを持ったからこそ聞くことができた人々の声や、実際に住んだからこそわかる町の実情は、被災地の今を知るうえで非常に重要な情報源となる。被災地の話題となると、どうしてもマイナスな事象ばかりが目立って、聞くだけで気が滅入ってしまうこともある。しかし、町で起こった好転的な変化や楽しいイベントの情報など、町が元気になっていく情報も広まることで、遠く離れた地から被災地に思いを寄せる人々の心を救うことができていると私は感じた。

そして、このように実情を外部に伝え続けていくことで、より多くの人々が被災地に思いを馳せ、考えを深める機会を提供することにも繋がる。そんな岩田記者の活動を知り、現地の様々な人々と語り合いをさせていただいた私たちにも、見聞きした出来事を伝え続ける役割が与えられたと私は感じている。岩田記者のように被災地での実情を発信してくれている人々の思いを受け取り、それをまた未来ある子どもたちに伝え続けていくことが、現地を視察させていただいた私たちの責務であると強く感じた。

5.先端技術拠点の最前線

【福島水素エネルギー研究フィールド】

福島の新たな産業について詳しく知りたい我々は、武田先生のご協力あって福島水素エネルギー研究フィールド（FH2R）を見学することができた。

FH2Rでは、2018年から福島県浪江町で建設が進められ、2020年2月再生可能エネルギー（主に太陽光発電）を利用した世界最大級となる10MWの水素製造装置を備えた水素製造施設である。本施設では本施設は再生可能エネルギーなどから毎時1,200Nm³（定格運転時）の水素を製造する能力を持ち、電力系統に対する需給調整を行うことで、出力変動の大きい再生可能エネルギーの電力を最大限利用するとともに、クリーンで低コストな水素製造技術の確立を目指しており、日本の水素社会実現に向けた技術開発の中核を担っている。



視察では国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO) 水素・アンモニア部の主任荻蒲一歩さん、主査鈴木崇史さんに対応して頂いた。

私たちはまず、研究開発棟でエネルギーとしての水素の特性や作り方、F H 2 Rで作られた水素の使用例などNEDOのお二方からお話を伺った。水素には①電力を大量に長期間貯蔵することができる②電気エネルギーに変換される工程で二酸化炭素を排出せず、地球温暖化などの環境問題の改善に大きく貢献する③再生可能エネルギーの余剰エネルギーを水素に変え、活用することができるという 3 つのメリットがあり、次世代のエネルギーとして注目されている。F H 2 Rで作られた水素は道の駅なみえや J ヴィレッジなどの福島県内の施設で使われている他に東京オリンピックの聖火トーチや東京都のバスなどの県外でも広く活用されている。

その後私たちは水素製造装置や製造した水素をためる水素ガスホルダー、水素を運ぶ水素ガストレーラー、水素ガスカードルを見学した。水素製造装置は火力発電や原子力発電で用いられるものよりもかなり小さく、音も静かであった。トレーラーやカードルには子供たちが書かれた絵が描かれており、まさに次世代のエネルギーであると実感した。

〈質疑応答〉

○福島に関する企業は参加しているのか

福島に関係する企業はあまりない。岩谷産業さんがここで作ったエネルギーを運ぶくらい。東京などからきた企業が試験の時だけ訪れている。今参加している企業は、国立研究法人NEDO、TOSHIBA、東北電力、AsahiKASEI、UCC、住友ゴムなどである。



○再生可能エネルギーは余るのか

火力発電の時でもそうだが、基本的にエネルギーは作っている量と使っている量を調整しないとイケない。再生可能エネルギーは作る量が日によって変わるため、作られたエネルギーは回すしかない。

○水素を使っていて良かったこと、難しいこと

利用者さんの声は届いていないが、“福島で新しいことをする”のに意義があると思っている。都心よりも新しいことに挑戦できる。新しいエネルギーを研究できるいい機会が生まれた。

【福島ロボットテストフィールド】

福島ロボットテストフィールドは JR 原ノ町駅から海側に立地している。福島イノベーション・コースト構想に基づきロボットの実証拠点として整備された。福島イノベーション・コースト構想とは、東日本大震災及び原子力災害により失われた産業基盤を新たに創出する国家プロジェクトだ。無人航空機エリア、インフラ点検・災害対応エリア、水中・水上ロボットエリア、開発基盤エリアに分かれている。私たちは開発基盤エリアの屋上から見学をした。ここで開発している訳ではなく、ここでは試験的な実証する場として実際の現場に近い建物や状況を再現されていた。



【考察】

福島水素エネルギー研究フィールド、福島ロボットテストフィールドの両方とも、全国各地で研究していたことを実証する場として運営されていることがわかった。実際にここではほとんど開発している訳ではない。震災で全部なくなったからこそこのような広い場所をとって研究ができています。「福島」という場所自体の価値づけには成功しているが、人や企業はあくまで利用のため臨時で訪れているようで、一時的かつ地域とは繋がりがあまりないように思えた。

しかし、福島で新たな産業を作り出そうという次世代に向けたプロジェクトが進んでいることはとても嬉しく、喜ばしいことだと感じた。水素エネルギーはまだまだ研究中のものであるが、今後福島が多くで研究が進められ、世界に誇れるような産業になることを願っている。

6. 総括・展望

【総括】

福島県の一次産業は震災当時強い風評被害を受けた物の一つである。科学的データに基づく証明が行われていても、偏見があったことが分かった。しかし、風評被害に遭われてはいたが、売れないということではなかった。メディアを通して産業の現在を知ることが多いが、報道から風評被害への意識が強くなりすぎて、被災地の実態を正しく理解しきれなかったことがわかった。現在の実情を正しく伝える必要がある。

双葉町のために戻ってくる若い人は少ないらしいが、双葉町の賑わいを戻そうとする取り組みは少しずつ広がっていた。実際移住者は増えているようだった。

震災から年月が経つと、震災について情報を得る機会は著しく減少し、取り上げられる内容も限られてくる。地域の人々の声や実情は、被災地の今を知るうえで非常に重要な情報源となる。被災地の話題はマイナスなものだけでなく、プラスのものも広まることで、より多くの人々が考えを深める機会を提供することにも繋がる。

先端技術拠点として、福島で新たな産業を作り出そうという次世代に向けたプロジェクトが進んでいることを訪れることで実際に感じる事ができた。今後福島で多くで研究が進められていくのが想像できる。一つの復興としてのかたちを知ることができた。

どの場所でも復興が進んできていて、そのプラスの情報を伝えたいという思いに触れることができた。私たちは限られた情報から今もなお震災の傷跡が残り続けていると想像していたが、現状人々は明るく積極的に前に進み続けていた。

【今後の展望】

今回の視察聴き取りの結果から、震災の負の遺産ばかりではなく、被災地が歩んでいる今を知ることについて今年度は見学してみたくなり、一次産業と先端技術に焦点をあてた内容となった。実際に足を運んで見て聞くことで、現状を知ることができた。

私たちの多くは教師を志望している。今回のお話を聞いた人たちからいただいた言葉から、私たちは震災や原発事故について見聞きした出来事を伝え続ける役割があるように感じた。被災地での実情を発信してくれている人々の思いを受け取り、それをまた未来ある子どもたちに伝え続けていき、偏った情報や根拠のない話に左右されない確かな情報・知識を子供たちに伝え、発信していきたい。

7. メンバー振り返り

●4年生

G3178 川内野 裕介

今回の視察では、過去2回とはまた異なる視点から福島で起きてしまったこと、今福島で復興に向けて起こっていることについて知り、考えを深めることができた。一言で復興と言っても環境や職業によって形態は様々である。仲間たちがいつ戻ってきてもいいように土地を守り続けた人、自分たちの職業の魅力や、街の人々の生活をメディア等で発信し続ける人、もともと福島には無かった先端技術を用いて街を興そうとする人、様々な人々に出会い、思いに触れてきた。お話頂いた人々の活動と努力の結果が実ることを願っている。

3年間のゼミ活動を通して、私は1つの役割を与えられたように感じている。それは、被災地のことを考え、学び、伝え続けていくことである。日常で見聞きする表面的な情報では、東日本大震災は既に「終了」したものになっている。災害大国日本では東日本大震災以降も様々な災害が起こり、その度に大きな注目を集めている。しかし、その注目は持っても半年程度にとどまり、すぐに人々は自身の生活に戻り、ほとんどの人は被災地のことを忘れてしまう。情報を待つだけでなく、積極的に探し求める姿勢がなければ、我々は被災地のことを知り、考える機会を得られない。災害が起きたことを忘れないこと、これは災害から学ぶ姿勢を放棄しないことであると私は考える。私はゼミ生として活動した3年間の中で、たくさんの人々の思いや言葉を頂いてきた。この先は、私が受け取った思いを、未来の人々に伝え広めていく番であると考えている。教師として、未来を生きる子供たちに少しでも多く知見を伝え、考える機会を提供できるように今後も学び続けていきたい。

●3年生

G4009 我妻青樹

1次産業に焦点を当てながら視察を行ったのは初めてだったが、福島で育った私にとって「風評被害」という言葉はよく聞く言葉であった。そのため、1次産業に従事している方々にとっては今もまだ頭を悩ませる問題であると考えていた。しかし、今回の視察でお話を伺った方々は、避難生活や風評被害など様々な困難がありながらも乗り越えて前を向いている姿がとても強く印象に残った。福島では処理水の問題など未だに震災の爪痕を感じる機会が多い。そのため、マイナスなイメージを持ちやすいが、そこに住む人々の前向きな歩みにも目を向けていく必要があると感じさせられた。

今回の視察を通して、教員を目指している私たちは子どもにとって福島を「原発事故の被災地」というマイナスな認識にするのではなく、「さまざまな困難を乗り越え、復興している新しい町」というプラスな認識にしていくことが必要だと感じた。私たちは、今後東日本大震災・原発事故を知らない子どもたちと向き合っていくことになる。その際、マ

イナスな話題だけではなく、私たちがこの活動を通して見聞きしてきた方々の歩みに触れることも大切なのではないだろうか。そのためにも福島について学び続ける姿勢を大切にしていきたい。

G4066 蒲生結香

今回は、1次産業と先端技術という点で視察した。前回は、被災地の現状と将来への展望だったので、1次産業について現状が知りたくなり、このような日程になった。

1次産業では自分の実家が農家だったからこそ風評被害の大変さや今もなお対策する必要性をわかっているつもりだったが、今回お話を聞いた畜産農家の山田さんや請戸漁港の職員さんはマイナス面ではなく、プラス面について多くのことを話していただいた。印象深かったのが、漁港の職員さんが「県知事が、風評被害の対策をしつづけてしまうのもまだ続いている印象になってしまう。」と言っていた。」と話してくれたことだ。安全性をアピールするにはやらないことも一つの手だと気づいた機会になった。

先端技術に関する施設を見学して、福島の沿岸部は震災で全部なくなったからこそ、福島で新しい物に取り組むこと自体に意義が生まれてくるのだろうと思った。広い土地があるからこそ都心ではできないことに挑戦できる点では企業側にとっても良いことだとは思ったが、あくまで実験をしたり、試行したりする場だからか人の行き来は少なかった。

G4087 小針愛香

今回で3回目の福島視察では、特に1次産業に目を向けて様々なところを訪れ、現地の人の話を聞くことができた。風評被害や避難生活などももちろん辛いことはあっただろうが、前向きに楽しそうに生活している姿が印象的だった。むしろ私の方が、被災地、被災者だから今も大変な状況なのかなと勝手にマイナスに捉えてしまっていた。だからこそ、現地に行って、実際に話を聞くということは大切だなと改めて感じた。

教員になる私たちに向けてのお話でもあったように、震災や原発事故について知らない子供たちに、その土地が暗いもの、怖いものだけでなく、そこで楽しく暮らしている人がいることや日々助け合いながら前向きに復興に取り組んでいる姿を感じてほしい。そのために、自分の想いを込めて子供たちに伝えていきたい。

現在、原発の廃炉作業について進められている中で度々ニュースに取り上げられているが、今後どのようになるのか気になるところである。

G4133 菅原 悠太

今年は私自身他の活動との兼ね合いが厳しく、思うように活動に参加できなかった。しかし、この班として活動できた視察を通して、「風評被害」の実態を肌感覚で感じる事ができた。「福島県産」として被害にあっていたことや、数割値段が下がったものの、牛は売れていたことなど聞いてみて初めて知ることが多かった。また、値段に関しては漁業の方に聞いても同じで、あまり大きく困っている様子はなかった。このことは私の認識と大きく異なっていたと感じた。

実際に話したり、聞いたり、見たりすることの重要性を感じた。今後、もし教員になることができれば、機会や時間の許す限り体験活動を行ってみたいと考えた。自分で体験し

て、振り返りを行うことが、将来課題解決をしていかなければならない子供たちにとって、とてもよい経験になると考えた。この活動ができてよかったと心から思う。

G4193 馬渡 紗恵

今回の視察では特に1次産業について調査してきたが、どこか遠い世界で起こっていることのように感じていた風評被害について実際にお話を聞くことで、改めて考えるいいきっかけとなった。また、被災地に元の住民が戻っていても、そうでなくとも、地元とつながりを保ちたいと思う人、つながっている人はたくさんいることが分かり、そこに人はいなかったとしても、人々の強い思いがあり、その思いを大切にしたいと思う人々との間で紡がれていく物があることが分かった。

私は去年まで、次世代伝承班に所属しており、宮城県内の被災地を中心に視察してきていたが、今年は初めて原発班として福島県の被災地を視察した。伝承館の展示物や、被災者の方々のお話など、今回の福島県の視察で感じることができた原発の被害と去年までの活動の中を通して感じた宮城県の津波の被害は当たり前だけれど全然違って、去年までの活動を踏まえながら今年はその違いを原発班として学ぶことができ、非常に貴重な体験をすることができた。

●1年生

G6084 小林萌花

私は福島県出身であるため、原発事故が福島にもたらした影響やその後の復興の歩みなどは知っているつもりでいた。しかし、現地を訪れそこで生活を営んでいるの方々のお話を伺うと自分の認識と現地の実態がずれていると実感した。このようなずれが風評や風化をもたらすと思うので、自分自身が現地を訪れたり、現状について調べたりする活動に加え、今後は伝えるということに重点を置いた活動をしていきたいと思う。

今回の視察で印象に残っているのはふたばプロジェクトの渡辺さんがおっしゃっていた「双葉とつながっている人を増やしていきたい」という言葉である。私は福島で教員になりたいと思っている。その時には自分が見たり聞いたりした経験を子供たちが自分事としてつながりを感じられるように伝えていきたい。